

ディズニー映画における女性キャラクターの主体性と関係性

宮本 沙暉

ジェンダーステレオタイプが社会に広く頒布している理由の一つにメディアによる強化があるとされている。中でもディズニープリンセスシリーズに登場するディズニープリンセスは、ジェンダーステレオタイプを助長させる存在であると指摘されてきた。とはいえ、近年の研究では、ディズニープリンセスのジェンダーステレオタイプは弱まっており、受動的な存在からより主体的な存在へと変化しているという考察も現れている。これらの研究は、ディズニープリンセスに関するものであり、プリンセス以外のディズニー女性キャラクターに関しては、ほとんど研究がなされていなかった。

本研究は、この空白を埋め、ディズニー映画の一般女性キャラクターにおけるジェンダーステレオタイプ表現の様相を明らかにすることを目的とし、女性キャラクターの主体性や関係性を指標化した上で、その年次変化を調査し、統計処理を加えて分析した。

調査対象は、女性のメインキャラクターが登場するディズニー映画 18 作品 19 人物とした。分析手法は、上瀬、佐々木 (2016) の手法を援用し、女性キャラクターの主体性を示す指標として「話す時間」と「攻撃行動回数」の2つ、女性キャラクターと男性キャラクターとの関係性を示す指標として「共行動時間」と「援助行動回数」の2つ、計4つの指標について、調査と分析をおこなった。

その結果、ほとんどの指標で、ジェンダー描写が年を追って変化しているという事が明らかになった。まず、「話す時間」については、全体的に近年になるにつれて割合が増加し、女性キャラクターの主体性が年を追って増加する傾向にあることが示された。次に、「攻撃行動回数」については、1990年頃以降、攻撃行動をする女性キャラクターが現れており主体性が増していることが示された。次に、「共行動時間」については、女性キャラクターと男性キャラクターが困難を共に乗り越えることで関係性を深めていく事例が増加する傾向にあることが示された。最後に、「援助行動回数」については、一部、ジェンダーステレオタイプが残存していることが示された。

これらのことにより、ディズニー映画に登場する一般女性キャラクターのジェンダーステレオタイプは、一部に残存するものの、社会情勢と呼応しつつ、年を追って女性の主体性が増加し、男性との関係性も対等な方向へ向かうという態様で、減少傾向にあることが明らかになった。

本研究の成果は、ディズニー映画以外の映像コンテンツにおけるジェンダーステレオタイプの研究に資するのみならず、メディアにおけるジェンダー論一般にも有益な知見を提供するものと考えられる。今後、映像メディアのみならずメディア一般のキャラクター表現における主体性や関係性の研究が進展することが期待される。

(指導教員 辻 泰明)